

棚倉の石仏・石碑

1

新田義貞の墓 （富岡字寺ノ前）

富岡地区にある蔵光寺ぞうこうじの境内に、「源光院殿正四位上前近衛中将源朝臣新田大守義貞大居士」という、極めて長い戒名を刻んだ石碑があります。南北朝時代の武将で鎌倉幕府を倒して名をあげた新田義貞の墓といわれています。

義貞が延元3年（1338）に足利尊氏あしかがたかうじ（のちの室町幕府むろまちばくふ創始者）に敗れて戦死した際、彼の妻であった勾当内侍こうどうのななしがその首を守り本尊の地蔵菩薩じざうぼさつを携えて東北地方に逃げのび、棚倉の地にたどりつきました。長旅の疲れによって病気となってしまった内侍は、富岡の地で療養に努め全快します。その後地域の人々の助けでこの地に義貞の墓と地蔵菩薩を安置するお堂を築き、自ら尼となって日夜義貞の御霊を弔ったと伝わっています。



2

高橋元種の墓 （流字豊山）

流地区豊山の墓地には、東山の五輪塔と呼ばれる、人の背丈より高くそびえるひときわ大きな五輪塔が行んでいます。江戸時代の初めに棚倉で最期を過ごした武将、高橋元種の墓です。

元種は、もともと日向国延岡ひゅうがのくにのべおか（宮崎県）の戦国武将で豊臣秀吉の九州攻めの際に降伏して付き従い、のちに朝鮮出兵などで活躍しました。関ヶ原の戦いでは徳川家康率いる東軍に味方し、江戸時代に入っても引き続き延岡を支配しました。また、延岡城の築城や城下町建設にも尽力するなど、延岡藩の基礎づくりに大きな業績をあげました。



それまで順風満帆に歩んできた元種でしたが、慶長18年（1613）に突如幕府から藩主を辞めさせられ、領地も没収されてしまいます。理由は、罪人として幕府から追われていた水筒勘兵衛を匿ったというものでした。棚倉藩にお預けとなった元種は長男の左京と共に延岡を離れ、遠路はるばる棚倉にやって来たのです。

棚倉での元種の生活を語る資料は残念ながらありませんが、同19年（1614）に44歳で没したとあります。また、息子の左京は初代棚倉藩主立花宗茂や棚倉藩主丹羽長重に仕え、のちの子孫も代々丹羽家に仕えたといわれています。

3

さんかいばんれいのとう 三界万霊塔 (大梅字段河内)



げんじ 元治元年（1864）、みとほん 水戸藩のそんのうじょういうんどう 過激な尊王攘夷運動を掲げ、
てんぐとう 一派である天狗党が反乱を起こし、ひたちのくに 常陸国（茨城県）や
しもつけのくに 下野国（栃木県）を荒らしまわった、いわゆるてんぐとう らん 天狗党の乱
が勃発しました。

この争乱は結局、幕府や水戸藩などによって鎮圧されましたが、その際に天狗党の残党が八溝山へ逃げ込みました。飢えや寒さに耐えられず下山して降伏した彼らでしたが、幕府の命令によって多くが捕まり、処刑されてしまいます。

大梅地区には、藩内で捕まって処刑された天狗党の志士たちを供養するため、15代棚倉城主松平康英が建立した「三界万霊塔」が建っています。また、この時捕まった者の中にはわずか13歳の少年も含まれていましたが、そのあまりに毅然とした最期の様子は「八溝小僧」とあだ名され、伝承として今に伝わっています。

4

いのくさわけじぞうそん 伊乃草分地藏尊 (棚倉字宮下)



ごかさか 昔、五箇坂（棚倉字宮下）と呼ばれていた坂の北側にある小高い丘の上に立つ地藏尊です。

伊乃草分地藏は、古代のしおいのこじあたいのみこと 塩伊乃己自直命をお祀りしたものとされています。大昔、塩伊乃己自直命はこの地方を開拓して農業や織物の技術を伝えた人物として人びとから慕われ、のち

にこの地を拓いた神様として神社に祀られるようになりました。その後、仏が日本の神の姿で民の前に現れるという神仏習合という考え方が広がると、塩伊乃己自直命も次第に地藏菩薩の姿で崇められるようになったようです。

なお、名称の頭に付く「伊乃草分」とは、「伊乃(野)」の里を初めて開拓したこと＝草分という塩伊乃己自直命の業績からきています。

5

とみおかくようとう 富岡供養塔 (とみおか てらのまえ (富岡字寺ノ前))



供養塔とは、鎌倉時代から室町時代にかけて、死者の供養の目的で作られた石造物です。全国的には板碑いたびとも呼ばれ、現在の墓地で見られる卒塔婆そとぼの原型であるという説もあり、中世における信仰世界を知る手がかりとなる資料の1つとして研究されています。

棚倉町内では、現在12基の供養塔が確認されています。富岡地区にはそれぞれ延慶2年(1309)、文保2年(1318)、延元4年(1339)に作られた3基と年号不明の1基があり、町内の供養塔の中で最も古いものです。

棚倉の名勝

1

やみぞさん 八溝山

棚倉町の西側を画する八溝山地の最高峰であり、福島県や茨城県、栃木県の境ともなっている山が、八溝山(標高1022m)です。

山名の由来はいくつかあるようです。代表的なものを挙げてみましょう。1つは、久慈川の水源となる水を集める、山中の幾多にも入り組んだ溪谷をまとめて呼んだ総称として八溝と呼んだという説。また、今のように

